「ミャンマー／ビルマご遺骨帰国運動」

追加（経過）報告書

２０１５年4月1日　-　２０１５年7月３１日

報告者：井本勝幸

・ミャンマー/ビルマご遺骨帰国運動　現地調査隊長

・UNFC「ビルマ統一連邦評議会」コンサルタント

・GMSAEDC「メコン河流域圏農業・教育開発センター）代表

ザガイン管区ご遺骨調査情報

【カレーミョウ地区】

１．インダイギー村（ Endaigyi village）

（N）２３°１４，７４７’

（E）０９３°０７，１７０’

日本軍第３３師団２１５連帯の野戦病院跡と埋葬地（多数のご遺骨有りとの証言）。インパール作戦敗退後、２１５連隊は劣勢を立て直すためにこの地に連隊本部を構えている。現地証言者のウー・ラ氏（８６）によると現地日本軍の軍医名はサカマキ。現地司令官名はイチカワ。（『歩兵第二一五聯隊戦記』（３６５頁、昭和４７年１１月３日、編集員会：今井和夫、朝日印刷光学（株）、前橋元総社町６７）には第三大隊本部に市川清義大尉、第二大隊第二機関銃中隊に坂巻憂中尉の記述有り。）この地は　現在はミャンマー国軍（sah kah cah10）のキャンプ地となっている。ウー・ラ氏によると「この辺りには２つの日本軍の病院があった。インダイギー村にあった病院付近は今でも私達は”ビョーイン”と呼称している。そこ（一つ目の大きな病院）には埋葬地があったが、もうひとつの２つ目の病院に埋葬地があったかどうかは定かではない。その２つ目の病院はインダイリー村にあった。『戦史叢書　第三篇第一章インパール作戦、四〇一頁』（防衛庁防衛研修所戦史室）によると、

「病院ハ左ノ如ク開設スヘシ・・・。

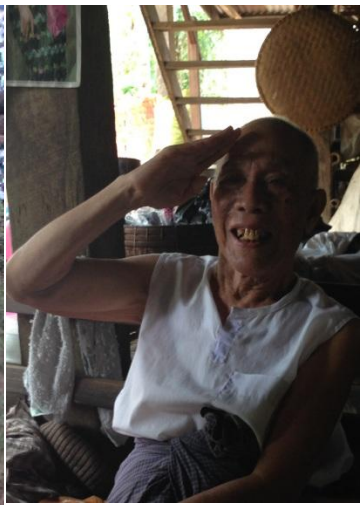
第一野戦病院　　カンタ附近（カレミョウ南側）

第二野戦病院　　インダンギー附近

第一患者療養所　インダンギー附近

第二患者療養所　第二ストッケート附近」とある。

戦史との照合を試みるとウー・ラ氏の言う一つ目の大きな病院とはインダンギー附近の「第二野戦病院」であり、二つ目の病院とは同じくインダンギー附近の「第一患者療養所」（現インダイリー村）であった可能性が高いと思われる。ちなみにインダイギーの「ギー」とは「大きな、大人の」という意味で、インダイリーの「リー」は「小さな、子供の」という意味がある。（また、「カレー」という言葉の意味も同様に「子供の」という意味である。）それは大きな村から小さな村が分家して出来たことを意味していることが今回の調査で判明した。インダイギー村からインダイリー村へは南へわずか１マイルの近距離であり、インダイリー村は戦後になってインダイギー村から分家して作られた新しい村であることが判った。インダイリー村の村民は全員が先の大戦後に移住して出来た新しい村であるため村民はだれもそこにかつて日本軍の病院ないし療養所があったという記憶を持っていなかった。インダイリーにあったという病院が戦史の如く「第一患者療養所」であったとすれば、そこに埋葬地があったかどうかは定かではないと言うウー・ラ氏の証言にも符合するように思われる。



（※インダイギー村の日本軍第３３師団２１５連帯の野戦病院埋葬地と推定される場所。奥にある林の箇所が埋葬地。毎年３月に野焼きを行う。野焼きを行うと跡地の状況がより良く分かるとのこと。）

（※インダイリー村。ここに第一患者療養所があったものと推測される。）

２．インダイギー村（同村）

（N）２３° １５，３５３’

（E）０９４° ０６，８０６’

日本軍の倉庫及び貨幣（軍票）印刷を行った場所。現在は民家となっている。ご遺骨は確認されていない。

３．ナーヌアイ村（Nahnuai village）

（N）２３° ２１，３５３’

（E）０９４° ０５，７０８’

日本軍第３３師団右突進隊と思われる軍用トラック基地。現在は公立学校の敷地となっている。ご遺骨は確認されていない。

４．カンタヤ村（Kantaya village）

（N）２４° ３５，５８０’

（E）０９４° ３３，８７１’

同日本軍の基地跡。現在は空き地になっている。ご遺骨は確認されていない。

５．カンラー村（Kanlah village）

（N）２３° ３１，１９４’

（E）０９４° ０５，３８５’

同日本軍戦車基地跡。現在は耕作地（米）になっている。ご遺骨は確認されていない。

６．ヤザギョー町（Yajagyu Town）

（N）２３°２４，１５３’

（E）０９４°０４，９３１’

同日本軍基地跡。現在は荒地（個人所有地）となっている。ご遺骨はまだ確認されていないが当地は撤退する日本軍と英印軍との間で激戦が交わされた場所であり、引き続き調査を続ける。前記『歩兵第二一五聯隊戦記』（インパール撤退作戦、聯隊の行動概要、カレミョウ、カレワ付近における後退作戦）には「特にヤザギョウ付近に進出した英印軍の活動は、きわめて活発であった。下手をすれば師団主力がカレミョウ平野で捕捉、せん滅されそうな形勢になった。そこで師団は、井出大尉の指揮で、追及、到着していた補充員約三百名をもって、ただちに井出集成大隊を編成して、ヤザギョウ付近の敵に対処させた。この戦闘で百十数名の戦死者があった。これらはまだ所属中隊の定まっていない将兵であり、戦没者名簿の“所属不明”がそれである。」（２６２～２６３頁）とある。

７．ミンタ村（Minta Village）、モーライク・カレー (Mawlaik Kalay)

（N）２３° １７，０３８’

（E）０９４° ０４，７６４’

同日本軍基地跡。英印軍が軍用飛行場としていた。ご遺骨は確認されていない。

（写真左は飛行場跡から西側にあるインド側を臨む。山の麓はインダイギー村。写真右は飛行場跡から東側にあるミンタ村を臨む。）

８．同村

（N）２３° ２２，５８９’

（E）０９３° ４６，２５４’

日本軍の倉庫があった。証言者のウー・ポー・チョエ氏（８０）によると「倉庫には守り番が常時８名いた。タカノさん、ムラヤマさんの２名の名を覚えている。この村で１名の日本兵が亡くなったが、遺体は仲間が持ち去って行った。」とのこと。

【タム地区】

９．ナムタ村（Namuta village）

（N）２３° １７，９５７’

（E）０９３° ３８，６９９’

日本軍第１５師団（祭）左突進隊と思われる陣地跡（塹壕陣地跡有り）、現在は空き地。ご遺骨は確認されていない。

１０．同村（Namuta village）

（N）２４° ０４，５２８’

（E）０９４° １６，６５１’

同日本軍が作った軍用道路。ご遺骨は確認されていない。

１１．マンタウン村（Mantaung village）

（N）２４° ３７，９５４’

（E）０９４° ３３，７９６’

同日本軍の大隊基地跡。現在は個人の所有地。ご遺骨は確認されていない。

１２．同村（Mantaung village）

（N）２４° ３７，９５６’

（E）０９４° ３３，８０１’

日本軍が作った軍用道路及び基地跡。現在は森林になっている。ご遺骨は確認されていない。上記個所に近接している。

１３．アウン・ザ・ヤ村（Aung za ya village）

（N）２４° ３９，５５６’

（E）０９４° ３４，２２４’

ダウンダット(Thaungdut)の北西１５ｋｍ。日本軍第１５師団（祭）左突進隊の基地跡。現在は水田となっている。ご遺骨は確認されていない。

１４．同村（Aung za ya village）

（N）２４° ４１，３６４’

（E）０９４° ３４，０８４’

日本軍第１５師団左突進隊の野戦病院跡と埋葬地。現警察署敷地内。警察副所長の証言では「多数のご遺骨が埋まったままになっている。」とのこと。

埋葬地は現警察署（野戦病院跡）の裏庭にある。雑草が茂っている個所から奥に見える小屋までが埋葬地。

１５．パイレン村（Phailen village）

（N）２４°４１，３６４’

（E）０９４°３４，０８３’

同日本軍の軍用車輌基地跡。現在は個人所有の荒地（元は畑地）となっている。ご遺骨は確認されていない。

１６．ター・ナン村（Tah Nan village）

（N）２４°３５，５８２’

（E）０９４°３３，８７０’

日本軍基地跡。村人が多数の銃弾を発見している。ご遺骨は確認されていない。現在は仏教寺院敷地内。

１７．ミン・タ村 (Min Tha village)

（N）２４° ２５，８６３’

（E）０９４° ２５，５９３’

日本兵と思われるご遺骨１柱を発見。第１５師団左突進隊所属と推測される。発見地は民家の敷地内。発見者は３年前に庭掃除をしている時に発見した。女史によると「発見した時は全身白骨の状態だった。右手に剣と棒状の鉄の塊を握り締めていた。その他多くの遺留品と一緒に出てきた。気持ち悪かったので頭蓋骨やほとんどの骨は庭の隅のゴミ捨て場に捨てたが、今でもそこに埋まったままになっている。」ミン・タ村は赤シャン族の村。古老のウー・トン・ニョー氏（７８）によると「インパール作戦前から日本軍がこの村に駐屯していた。インパール作戦前に英空軍の空爆があり、村人を巻き込んだ死傷者が出た。このご遺骨はその時のものかもしれない。インパール作戦退却後は２～３名単位で次々と日本兵が落ち延びて来ては東の方へ逃げて行った。」とのこと。

家主のミン・ミン・フライン女史（写真左）

発見されたご遺骨と遺留品（遺体が右手に持っていた短剣、銃弾箱、不凍液のボトル）

遺留品（パイロット万年筆）

遺体が右手に持っていたという鉄の棒

歯と衣服のボタン

ウー・トン・ニョー氏（７８）

北部チン州ご遺骨調査情報

【テディム地区】

１８．ラウィブアル・ワード村　(Lawibual ward, Tedim Township)

（N）２３°２１，６９３’

（E）０９３°３９，０４１’

日本兵１名が埋葬された。証言者はプー・タン・クワル氏　Pu Thang Khual（７５）。土地所有社名はヌー・リアン・ネック女史　Nu Lian Ngek（６５）。

１９．同村

（N）２３°２１，７８３’

（E）０９３°３９，１２５’

日本兵１名が埋葬された。証言者はプー・タン・クワル氏　Pu Thang Khual（７５）。家主の名前はパ・サン氏　Pa Sing（３８）。

２０．同村

（N）２３° ２７，７４５’

（E）０９３° ４２，９３０’

日本軍の弾薬箱を保管。ご遺骨は確認されていない。家主の名前はプー・クワル・スアン氏（Pu Khual Suan）。

２１．マウンケン村（Mawngken village）

（N）２３° ２８，２８３’

（E）０９３° ４１，７７１’

日本軍兵士３５名が守備していたと言う陣地跡。ご遺骨は確認されていない。案内者はパ・セン氏　Pa Sen（４５）。地理的に第３３師団主力部隊のものか。

２２．同村

（N）２３° ２７，８９２’

（E）０９３° ４１，７７３’

日本軍兵士９０名が守備していたと言う陣地跡。ご遺骨は確認されていない。案内者はパ・セン氏　Pa Sen（４５）。地理的に第３３師団主力部隊のものか。村の共有林。

２３．バムザン村（Bumzang village）

（N）２３° ２７，６７７’

（E）０９３° ４２，８７４’

日本軍兵士４名が埋葬された。証言者はプー・ハン・リアン・タン村長（５３）。現在は空き地になっている。地理的に第３３師団主力部隊か。

２４．同村

（N）２３° ２７，７４０’

（E）０９３° ４２，９２９’

日本軍の塹壕跡。案内者はプー・ハン・リアン・タン村長（５３）。ご遺骨は確認されていないが、要発掘調査。第３３師団主力部隊か。

２５．トゥアンダン村（Tuangdung village）

（N）２３° ２７，７４５’

（E）０９３° ４２，９３０’

日本軍塹壕陣地跡。ここで約１０名の日本兵が亡くなっている。証言者はプー・タウン Pu Thang （５６）。現在は国有林。

２６．同村（同地点）

（N）２３° ２７，７４５’

（E）０９３° ４２，９３０’

日本軍陣地跡。案内者は上に同じ。

２７．同村

（N）２３° ２２，５７７’

（E）０９３° ４６，２４６’

日本軍陣地跡。案内者は上（２５）に同じ。ご遺骨は確認されていないが埋葬地のような痕跡有り。要発掘調査。

２８．同村

（N）２３° ２２，５８７’

（E）０９３° ４６，２５３’

日本軍陣地跡。案内者は上（２５）に同じ。ご遺骨は確認されていない。

２９．タインゲン村（Taingen village）

（N）２３° ２２，５８９’

（E）０９３° ４６，２５４’

日本軍兵士のヘルメット（鉄兜）と短剣。持ち主はプー・ダル　Pu Dal（５６）。ご遺骨は確認されていない。

カヤー（カレニー）州ご遺骨調査情報

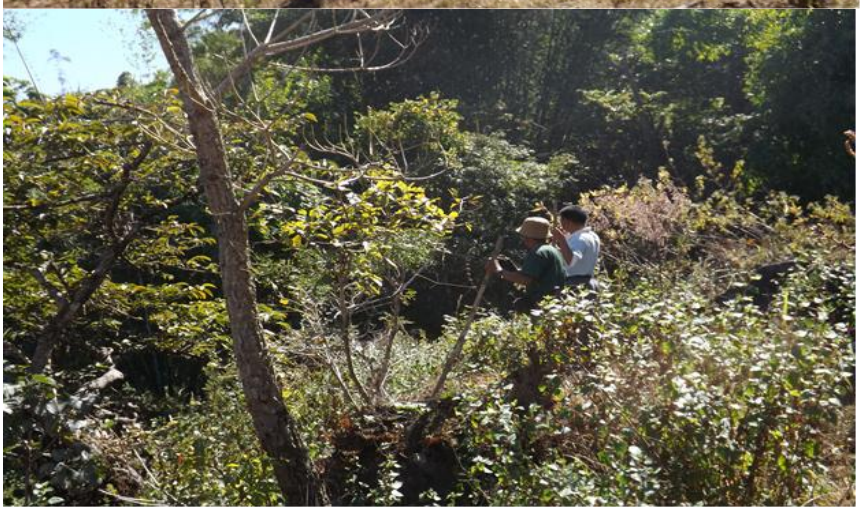
【デモソー地区】（Demoso Township）

３０．同村（Daw Law Khu village）

（N）１９°２７，４００’

（E）０９６°５８，９２２’

標高：１，４８８m



英軍、グルカ兵、カレニー兵と日本軍との交戦で約６０名の日本兵が戦死。（地元民は１９４２年と証言している）遺体は散乱したままで、山火事や山に生息する動物に食い荒らされた模様。詳細な調査を行えば残っているご遺骨を見つけることは可能と思われる。

３１．パライン村（Hpalaing village）※シャン州との州境

（N）１９°３３，７４２’

（E）０９６°５３，５９８’

標高：１，３６１ｍ

カヤー（カレニー）族を従えた英軍との交戦により、８０名の日本兵がこの湿地帯で戦死した。ご遺骨は付近に残されたまま放置されてきた。

【ペ・コン地区】（Phe Kone Township、Shan state border）

３２．ブラポ村（Blapo village, Phe Kone Township）

（N）１９°４１，３０１’

（E）０９６°５４，１８８’

１，４３１ｍ

日本軍の大きな基地があった。激戦地となったため、この基地跡には多くのご遺骨があるものと推測される。新たに日本軍が使用していた兵舎が見つかった。